

茨城大生インターンシップ研修②

人文学部3年

阿部 梓

水戸市内の体育館で毎週3回、車いすバスケットに障害者と健常者が一緒に汗を流している。車いすバスケットボール団体「スピニング・フープス・レポリューション」だ。メンバーは「このコートには障害者、健常者も区分けはない」と話している。

の程度に応じて持ち点が1ス体育館に週3回集まり、健常者や障害の程度が軽い人ほど持ち点が大きく、コートに出られる選手5人の総計には上(47)は高校3年生の時、代表の齋藤信之さん

車いすバスケット

健常者と区別なく汗

限がある。

スピニング・フープスなリ車椅子生活になっ「力」と話す。

・レポリューションは2た。車いすバスケットについて、車いすバスケットのコートには健常者、障害者の仲間入りを期待している。

ム5人で対戦する。障害川町のサン・アビリティけがや障害があっても一区別はない。齋藤さんは

「健常者は障害者を特別視しがちだが、一度一緒にプレーしてみれば、何も変わらない仲間だというのが分かってもらえるのではないか」と健常者の仲間入りを期待している。

研修を終えて

私たちが見ている新聞はたくさんの方の手を渡り作られているということを学んだ研修だった。働くことの楽しさを感じることができた。



車いすバスケットの魅力について語る齋藤信之さん＝水戸市見川町